

うつわ、うつわ、うつだわ、わたし鬱なんだわ、と混浴で一緒になった女はなにやらしきりに囁きかけてきたのだけれど、型通りの慰めをするのもなんだかありふれているだろうから私はぬるくなったお茶を飲んでやり過ごした。が、渴いたと思っていたのに胃の底まで入っていない——温泉に入ると喉が渴いて仕方がないからいつも必ずペットボトルを持ち込んでいたのもこの時代に混浴を許している旅館なのだからペットボトルなんて水に流すまでもないだろう、いやこの場合はお湯か——などと考えているうちに、湯けむりか霧か靄か霞か判然としない白い蒸気があたり一面に漂いだして、ときどき顔に触れる白っぽい粉はその蒸気が固まったものだと思った。冷たくどうやら雪らしかった、蒸気も雪もどンドン強くなっていき私たちの他に浸かっている客がいるのかわからない、ただ隣の女が湯で柔らかくなった私の太ももをしきりに揉みしだいている。感触だけは確かで、私は興奮しているのだから男なのだろう、いや単にのぼせているだけなのかもしれないしそれだけで自分が男と決めることなどできない。

けむりが顔に吹き付けてくる、私は温泉などにいなくてこの極寒の地で遭難していたのか、と、意識がはつきりした瞬間、そうではない私は裸でお湯に長くなっている、先ほどまで隣にいたはずの女はいない、右にいたのか左にいたのか、あれは私の幻だったのだろうか、すると私という人間も偽物に思えてきてしまいかし産まれた以上父と母が存在するはずだろうから私は思い出そうとする、けむりはますます濃くなる。

母は一緒にお風呂に入ったときいつも自分で作った物語を語って聞かせてくれた、でもその日は疲れていたのだろうか、私がねだると不機嫌そうにおまえがつくりなさいと言われたから必死になって喋ったのだった、私たちは本当にのどかな場所に暮らしていて毎日が夏休みで毎日がクリスマスで毎日大きな温泉に入ることだってできるんだ、すると母は、ならそのお話の中に入ってしましましょうか、となぜか大人と話すときの口調で言ったから怖くなってしまった、そもそも毎日温泉に入ることなどできるわけがないし私は母と一緒にいたらなんでもよかったから物語に逃げてはいけなかった、母はそのときどうだったか。

私はなぜ覚えていない、どうしてここにいるのだろうか、波打つ湯はぬるぬるして温かい、そうだ、私は忘れたかったのだ、忘れるために旅に出たのだ、自分探しではなく自分を忘れるために、誰もかれもが淋しくて、それを知ってもなお生きていくのは切なくて、死んでしまいたいと願うと物語が引き留める——買ってばっかで読んでないじゃないか、ぼくを書く約束は忘れたのかい——でも決してその物語に居続けることは許されずページは必ずど

こかで終わり私はここで生き続けなければいけない、お湯の音が聞こえる、寒い風が吹き湿った卵の匂いのするけむりを追い払う、夜空に星が見える、大きくなったり小さくなったり心臓みたいに瞬く、私も星になって空に浮かんでいく、星たちは群れをつくって仲よさげだけれど、実際は離れている。

何かを忘れている、思い出せない、湿ってつるつるした岩に頭をもたせる、私をおぶってくれた人がもう一人いた、父はいつもお酒くさかった、母はそれをひどく嫌っていたが私はむしろその匂いを好いてさえいた、母に内緒でお酒を飲ましてもらったときがあった——あれは日本酒だった——飲み込めないほどまずくて吐き出してしまいおかげで今でも日本酒が嫌いなんだけど、父はあるとき腹を抱えて笑っていた、私はうがいをするたびそのときの父を思い出し嬉しくなった、だいじょうぶ、私はまだ覚えている、そうしてもう上がろうとしたとき右隣にさっきの女が座っていて、いつのまに、と私が目を丸くして女を見ると、ねえ、見てよ、今蹴ったんじゃない、と大きなお腹を湯に遊ばせながら女が言った。

またどこからか白いけむりが出てきてあっという間に視界を白くした、舞い落ちる雪は湯面に消えていかず結晶となって残った、それは硫黄華だった、真っ白な花が湯の面に漂い揺られていた、真っ白な世界は明るくはなかった、だけど暗くもなかった、子宮の中の景色は案外こんな感じかもしれないと思った、もうすぐですよ、もうすぐです、と励ます声が聞こえた刹那、気づけば何も見えないのに眩しい光の残像に包まれ、ここは物語の中だった。